

Catalogue No.
20693-12

釉薬屋さんのひとこと

COMMENT

同じ釉薬でも、
焼くと違う顔を見せる。
だから飽きないし、気が抜けません。



釉薬(ゆうやく) | 色と表情をまとう

見た目だけじゃない。釉薬は器の個性です。

成形された器は乾燥・素焼きさせたのち、表面に釉薬を施します。釉薬は、珪石・長石・粘土・石灰石などを調合し、鉄・銅・コバルトといった金属を加えることで多彩な表情を生み出します。手作業で筆塗りするものや、スプレーで吹き付けるものなど、方法はさまざま。わずかな配合や塗り方の違いで、焼き上がりの印象が大きく変わるのも、美濃焼の奥深さです。



焼成(しょうせい) | 火の中で生まれ変わる

炎が語る、器の最終章。

いよいよ、器を窯で焼き上げる工程。約1250~1350℃の高温で焼成する「本焼成」は、美濃焼の仕上げとも言える重要なプロセスです。窯の中では、酸素の量を調整することで色の出方が変わる「酸化焼成」「還元焼成」といった焼き分けも。窯から器を取り出す「窯出し」の瞬間は、緊張と期待が入り混じる、ものづくりのクライマックスです。



5

窯屋さんのひとこと

COMMENT

温度も炎のまわり方も、その日しだい。
窯は、気まぐれだけど
正直なんです。



STEP 4

釉薬

色と表情をまとう



STEP 5

焼成

火の中で生まれ変わる



STEP 6

完成・検品

手に届くその日まで



完成・検品 | 手に届くその日まで

器の旅の終点は、あなたの食卓です。

焼きあがった器は、ひとつずつ丁寧に検品され、欠けや歪みのないものだけが選ばれて出荷されます。こうして、多くの職人たちの手と時間を経た美濃焼が、わたしたちの暮らしへと届けられるのです。その器を手にするとき、ほんの少しだけ、この旅のことを思い出してもらえたら——。それが、つくり手たちの願いです。

6



検品担当さんのひとこと

COMMENT

どの器も、誰かの暮らしの
一部になると思うと、
手が抜けません。



つくる人と、使う人をつなぐ器。



器ができるまでには、土を練る人、型を彫る人、釉薬を調える人、炎と向き合う人——たくさんの職人の手と技が重なり合い、ひとつのかたちが出来ていきます。けれどその物語は、窯から出た時点で終わるわけではありません。選ばれ、使われ、日々の食卓に置かれてこそ、器は本当の意味で完成します。少し緑が歪んでいた、釉薬の流れが揺れていた。そんなひとつひとつの“ゆらぎ”の中に、作り手の手の跡と想いが宿っています。今日、あなたが手にした器にも、つくる人の時間が流れています。それはただのモノではなく、誰かの手から、あなたの手へとつながった、小さな物語なのです。